

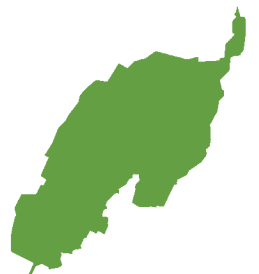
第三編

暮らしと文化

3

大口町史 現代史編

- 第1章 暮らしの変化
- 第2章 住民意識の変化
- 第3章 神社・寺院
- 第4章 風習
- 第5章 古文書・記念碑
- 第6章 指定文化財
- 第7章 人物伝





# 第一章

## 暮らしの変化

### 第一節 日常生活

純農村地帯であった大口町は、専業農家から兼業農家が増えていく一九六〇年代から一九七〇年代にかけて、高度経済成長期という時代背景もあり、住民の暮らしは大きく変化した。

#### 衣類

一九三五（昭和十）年前後、大口村内の一部で洋服の普及が始まっていたが、戦後に至っても農業に従事する家が多いこともあり、日常生活は木綿のシャツやモンペといった農作業に適した服装が多かった。一九四〇年代以降、ナイロンやポリエステルといった化学繊維による大量生産・大量消費の時代を経て、素材やデザイン、機能性など日常

衣料は、ライフスタイルの変化とあわせ多様化していった。履物も、戦後しばらくは下駄げたや草履ぞうりが日常的であった。一九五〇年代から徐々に靴やサンダルが普及し始めた。

#### 衣服

昭和初期は老若男女共に着物（和服）で、外に出る時は絹製品、家で働く時は綿の物を着用。学生・軍人・警察・公共交通機関従事は制服がありました。また、小学校の先生も男性は洋服、女性は和服でした。  
（大正十四年生まれ）

昭和十五年頃、国が国民服と称して帽子・服・ズボンの形を示して慶弔共に使用できるということで普及しました。女性も戦時中は華美な服装は制限されて、モンペに半てん姿が流行しました。男性の背広服は戦後一般の人が着用するようになり、女性の服装も自由になり一変しました。  
（大正十五年生まれ）

昭和四年生まれの私は小学校へ入学する時初めて洋服を着ました。それも学校にいる時だけで、帰宅して着物に着替えました。入学時に買ったランドセルは革製でなく代用品で出来ていたので二年も過ぎると破れて、その後は布製の肩掛けカバンで通学しました。

(昭和四年生まれ)

終戦直後の子ども達には、学校での制服というものはありませんでした。記念写真を見ると、服装や履き物はみんなばらばらで、中には下駄や草履を履いている生徒もいました。当時は兄弟姉妹が多かったので、兄や姉の古着をそれぞれ引き継いで着ていました。

(昭和十一年生まれ)

## 食事

アジア・太平洋戦争中、働き手となる男性は出兵したため、農作物の生産量は減った。一九三九年十一月、国は米穀搗精等制限令を出し、七分搗きにすることで重量を維持しようとした。翌一九四〇年には米穀管理規則の公布により、生産者である農家に対して、一定数量の自家保有米を除き、全ての米を決められた値段で国に売る義務を課した。これを米の供出といい、一九五四年まで続いた。大口村で

も、米を供出し、戦争が終わった後も白い米飯が食べられるのは正月などの特別な日のみで、日常は麦や雑穀の混ざった米飯であった。家によって違いはあるが、白米のみの米飯が一般的になったのは、一九六〇年前後のことであった。副食となる野菜・魚・肉類について、野菜は自家生産の野菜(大根・かぶら・里芋・人参・ごぼう・ナス・キュウリ・白菜・カボチャ・大豆など)、魚は川魚が中心で、海魚は塩物・干物が多く、肉類は鶏を飼育して鶏卵・鶏肉だった。その他、自家製の麴(こうじ)を使い味噌や醤油を作るなど、自給自足の食生活が一九五〇年代後半まで続いた。「オカズミソ」と呼ばれる、こうじ味噌の中に人参やごぼうを細かく刻んで混ぜ込んだものが日常のおかずとなった。漬物も自家製で、大根漬・梅干・ラッキョウ漬が主なものであった。鶏卵・鶏肉・魚は、ご馳走(ちそう)であった。祭礼日にあわせて、どの家庭でもサバや川魚の押し寿司が作られた。

また、二毛作で麦を作る農家が多かったため、数軒あった製麴所(せいめんじょ)を営む家に、収穫した麦を持ちこみ、その量に応じてもらった引換券で「ひやむぎ」や「うどん」と交換して、よく食べられていた。自分専用の茶碗(ちやわん)・汁椀(しるわん)・箸を箱膳(3-1-1)にしまい、箱膳をお膳にして食事をした。

一日の食事の回数は通常三回のところ、農作業が繁忙期に入ると、一日に四〜五回食事をとった(3-1-2)。

朝飯：……………午前五時〜六時頃  
 茶づけ……………午前十時頃  
 昼飯……………午後二時頃  
 ひるから茶づけ……………午後五時前後  
 夕飯……………午後七時〜九時頃

3-1-2 農家の食事時間  
 (繁忙期) (『大口町史』)

一九五〇年代後半から、各地区で簡易水道を引くようになると、屋外にある井戸まで水を汲みに行く手間がなくなり、炊事用の水は衛生的になった。また、土間であった炊事場に床を張り、かまどからプロパンガスによるコンロへと代わったのも、一九五〇年代から一九六〇年代にかけてであった。



3-1-1 箱膳 (大口町歴史民俗資料館所蔵)

水冷蔵庫は一般家庭でも高価であり、作った煮物などを蠅帳(ハイチヨウ)に入れた(3-1-3)。虫が侵入せず通気性もあり、冷蔵庫が普及するまでは食品を保管する重要なものであった。作って半日程度、次の食事の時間まで、残ったおかずを保管した。

一九六〇年代後半に、電気冷蔵庫が各家庭で使われ始め、ガスコンロ・炊飯器も普及すると炊事にかかる時間は短縮した。また、流通の発展によって商店は食材の品ぞろえが豊富になり、食卓は豊かになった。一九八〇年代にかけては、電化製品専門の大型店の進出・調理家電の進歩・インスタント食品・冷凍食品の普及により、さらに炊事時間が短縮した。それによって炊事の負担が減り、多様な家庭の状況に対応できるようになった。また、外食産業の発展により飲食店が増え、国道四一号沿いには一人でも気軽に利用できる軽食店も登場し、喫茶店でモーニングサービスを楽しむようになった。



3-1-3  
 右: 蠅帳 (ハイチヨウ)  
 左: 水冷蔵庫  
 (大口町歴史民俗資料館所蔵)

## 昭和十五年頃の食べ物

貧乏生活で小作百姓は当時化学肥料も少なく、有機質肥料も充分施せませんでした。(水田)一反当たり五〜六俵(三〇〇kg〜三六〇kg)の収穫で、そのうち年貢として地主に半分くらい納め、その残りや養蚕・大根・種子・麦作などで得たお金で家の切盛りをしました。

朝は麦飯に味噌汁・漬物、昼はご飯に漬物、夜は野菜の煮物が付く程度で、戦時中は米麦が統制になり年貢は金納になりましたが、供出と言って強制的割当で出荷していたため、米麦ともに家で生産しても産物は自由になりませんでした。その頃から米・麦・塩・砂糖・味噌・醤油・菓子・衣類・生活用品まで配給となり、自由に物資が入手できず難儀をしました。どこの家も代用食を色々考えて空腹をしのぎました。それでも農家は良い方で、都会の人は衣類や貴重品を食糧と交換して食糧難をしのいでいました(「たけのこ 荷生活と言った)。その頃の笑い話に、昨夜食べた雑炊が茶碗の中で箸が立った、倒れたと詮議しました。学校や仕事に持って行く弁当も半麦飯(米と押麦と半々)に、梅干しを一粒入れた日の丸弁当が主力でした。また、学校に近い所(上小口・中小口・下小口・余野)の児童・生徒で昼休み家に帰り食事をしてくる子もいました。(昭和四年生まれ)

## 終戦前後の自給自足

味噌・たまり(醤油)の作り方 地域が共同で大豆を持ち寄り、「こうじ」を入れて木製の絞り台に布袋をセットして味噌を作り、この味噌からたまり(醤油)を作っていたように思います。子どもの頃のことなどで定かではありませんが、味噌汁の中には大豆がそのままの姿でたくさん入っていました。

菜種油 麦秋(初夏)の頃に田んぼで菜種を栽培し、黄色い花が咲き終わり、しばらくすると菜種が出来ます。その菜種を茎ごとに家へ運び込んで、手でたたいて実を取り、家で蒸して絞って油を取りました。

野菜、果実の栽培 季節によって違いますが、大根・ほうれん草・にんじん・ごぼう・白菜・ネギ・ワケギ・サツマイモ・ジャガイモ・里芋・とろろ芋など、収穫できる物は何でも栽培しました。屋敷内には手っ取り早く食べられる物を栽培しました。お陰で田舎では栄養の面でバランスのとれた食事だったと思います。麦飯 今でこそ毎日白いご飯を食べていますが、当時は田舎でも麦ご飯が当たり前でした。地域の小屋に機械(ロール)があり、そこで麦を加工(平な麦に)します。白米がほんの少し入った「ひしやき麦」が大半の麦飯でした。お陰で脚気(わづ)にならず幸運でした。白米(白飯)が食べられるのは、盆と正月ぐらいでした。

### 粗目<sup>ざらめ</sup>

各家庭でサトウキビを作っており、それを地域の小屋へ持ち寄り、ロールに食い込ませて汁を集め、夜通し大きなトンネル釜で煮詰めて、どろどろになったサトウを大きな容器に入れて保管しました。検査後、家に持ち帰ります。この粗目は、正月の雑煮と食べるとか、その他に使っていました。

クズ米 共同の糶摺り機で糶がらを取って、米選機<sup>べんせんき</sup>（クズ米をより分ける道具）で生じたクズ米は、精米機でヌカを除去しそれを蒸して餅を作っていました。

（昭和十三年生まれ）

### 戦後の食糧事情

「お正月とお盆とお祭りは、麦が入っていないご飯だよ」と明治十四年生まれの祖父が言ったことを覚えています。祖父が亡くなったのは昭和三十二年で、もう麦飯ではありませんでした。

農繁期などは田舎では一日四回食事をとりました。食事の中心は麦ご飯と漬け物ぐらい。お茶漬けでかき込んでいました。とにかく空腹がしのげればよかったです。晩ご飯は家族そろって大きな飯台<sup>はんたい</sup>でいただきました。祖父・親父・長男といった順番で飯台の席が決まっていました。大家族では長男以外の子どもは飯台に席がなく、小さなお膳で各自食事をしていました。

（昭和十五年生まれ）

### 買い物

昭和四十年代後半、大口町の県営住宅の近くに住み始めました。県営住宅の真ん中辺りに八百屋さん・衣料品店・雑貨屋・米屋があつて日常生活に不自由はしませんでした。しかし、もつと色々見たいと、柏森の商店街、江南の本町通りまで足を運びました。そのうち犬山にスーパー「清水屋」の開店に合わせ、県営住宅から無料バスが、発着したものでした。

以前、近所に駄菓子屋さんがあつて、子どもたちのたまり場で、我が家の息子たちも「めんこ」「縄跳び」「キャラメル」「ガム」など、保育園・学校から帰ると勉強より先に駄菓子屋さんで飛んで行ったものです。そしてそのほかに、雑貨・クリーニングの取次店もやってみえて子どもばかりか、大人にも人気店でした。

その後、町内にも大きなお店が開店し、買い物物が便利になりました。その影で消えていったあの店、この店、会話が弾んだおじさんは元氣かなと、懐かしく思い出す日々を過ごしています。

（昭和二十年生まれ）

## 住居

住居は一九六〇年代まで、伝統的な農家の造りが多く見られた。一般の農家は、田の字の四部屋が基本で、すべて八畳間か、六畳間と八畳間の各二部屋から構成されていた。屋根は瓦屋根が普及していたが、「かや葺」もしくは、その上にトタンを葺いたものも見られた。

建物幅は一〇・八m（六間）、奥行は三・六m（二間）ないし四・五m（二間半）の平屋造りが基本であった。二階建ての場合、二階にある部屋の高さは一階と比べて低かった。廊下は、一般的に南側のみあったが、南側と北側にある家も存在した。南側の廊下の玄関側には「五右衛門風呂」があり、焚口は外の玄関横にあった（3-1-4）。天気の良い日には、複数の桶に水を汲み、日なたで水温を上げて風呂水に使った。これを「日なた水」と呼んでいた。



3-1-4 復元した風呂の焚口  
(大口町歴史民俗資料館所蔵)



3-1-5 大戸  
(大口町歴史民俗資料館所蔵)



3-1-6 かまど(クド)  
(大口町歴史民俗資料館所蔵)



3-1-7 消し壺  
(大口町歴史民俗資料館所蔵)

土間の奥には、かまど(クド)があり、土製のものから煉瓦造りのものに代わった(3-1-6)。風呂とかまどの燃料は、ワラ・麦ワラ・豆木・桑枝(当時「桑ボエ」と呼ばれていた)など農業の副産物や、野山の下刈りをした葉木(当時「ゴー」と呼ばれていた)であり、桑株・割り木などを使ったときは、その炭を一旦消し壺(3-1-7)に

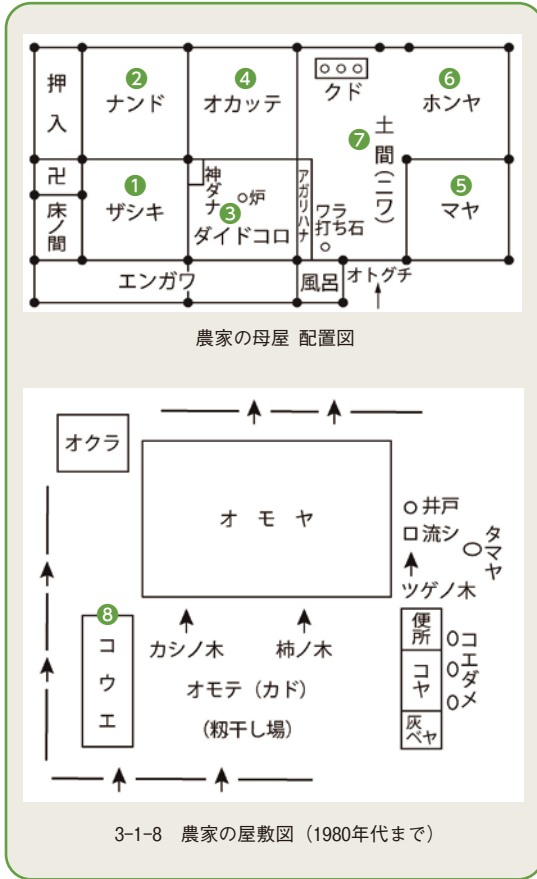


入れ、あとから火鉢などで使用した。

屋外には、農具入れの小屋に便所があり、外での農作業中でも家を汚すことなく用を足せた。小屋裏には、し尿をためる肥溜めがあり、下肥として利用した(3-1-8)。

井戸はほとんど戸外で、昭和になりツルベから手押しのかみ上げポンプを使用するようになった。

庭には、どの家にも柿の木があり、農作物の不作時には非常食となった。通常は果物として、また干し柿にして正月の楽しみとして食した。



3-1-8 農家の屋敷図 (1980年代まで)

① ザシキ

普段はあまり使用せず、客用として、あるいは養蚕に使用した。

② ナンド

寝間であり、タンス・長持が置いてある。

③ ダイドコロ

日常生活の中でもっとも多く利用する。家族の居間で、養蚕にも使用するため中央には炉があった。天井は踏天井で藁や麦カラがしまわれていた。

④ オカッテ

食事をする間で、天井を貼っていない家が多かった。

⑤ マヤ

土間が多く道具や米、麦などを主に入れておく間である。

⑥ ホンヤ

漬物・味噌・タマリなどが保存され、薄ぐらい間である。

⑦ ニフ

夜業をする仕事場で、藁打ち石や桑の葉をおく場所でもあった。

⑧ コウエ

おもに養蚕用として使用し物置ともなり、一間を寝室として使用するように間取りした家も多くあった。

一九六〇年代以降、家族構成や生活環境の変化により、農家の増改築及び建て替えが始まった。化学肥料の普及にともない下肥を使わなくなると、便所を改修してその横に風呂を造り、「五右衛門風呂」を取り払った。玄関の大戸は引き違いの戸に改修された。次に、ガスコンロや炊飯器、冷蔵庫の普及により、かまどが取り払われて、床を張り、キッチンが造られるようになった。

一九七〇年代になると、農業の機械化が進み、藁打ちなど土間での作業が少なくなったため、床が張られ、「マヤ」を主に応接間として改造するようになった。

一九八〇年代に入ると、農業従事者の高齢化、代替わりによる農業離れなどがあり、「コウエ」や古い蔵を撤去して庭を整備した。広くなった敷地には、子ども夫婦の新家を建てたり、あるいは本宅を二世帯住宅に建て替えたりして、若干の農機具や家庭生活に必要なものを収めた新しい倉庫と、何台もの車を止めるスペースを確保するようになった。また、家屋自体も木造建築にこだわらず、軽量鉄骨による家など様々な形態が見られるようになった。

### 堆肥

我が家では屋敷の東側に農耕用の牛を飼い、牛小屋の隣に鶏を飼っていました。小屋の前には牛糞ぎゅうふんとか鶏糞が積み重ねてありました。こえ場裏には人糞を溜める瓶びんがいくつもあって、人糞の古い瓶と新しい瓶とが順番に区別してあり、時間の経過した人糞を親父が天秤でかついで畑へ運んでいました。恐らく畑へ行く途中、人糞があちこちにこぼれ、随分臭かったと思います。どこのお百姓でも田や畑の元肥にするために、屋敷に堆肥を作り土肥として積み上げていて、この堆肥の中にはカブトムシやクワガタ、カナブンなどの幼虫が潜んでいました。夕暮れ時、電灯をつけると、いろいろな昆虫が飛んできて電球にぶつかり、うるさく思うことがありました。カブトムシなどは捕まえてみると意外に手足が強く、独特のにおいがしたことを覚えていきます。我が家の東にお宮さんの森があつて、夏の早朝、この森に入っていくと、樫かしの木やドンダリなど蜜が出る木に昆虫が集まっているのを見かけました。

今では、カブトムシとかクワガタの幼虫などはなかなか見つかりません。昆虫以外でも、例えば青蛙あおかえるやトカゲなどは、あまり見かけなくなった気がします。

(昭和十一年生まれ)

### 屋敷神様

我が家では屋敷の東の離れに二〇羽ほど鶏を飼っていました。

この鶏小屋で思いがけない珍客に出会うことがありました。珍客とは「青大将」のことです。青大将は卵が好物で、祖母が大切に育てた鶏の卵を失敬するため、「しっしっ」と大声を出して追い払おうとしますが、青大将は身体が大きいうえ卵を飲み込んでいるのでなかなか動こうとしません。旧家ならばどこの家でも青大将は夫婦で住み着き屋敷の鼠を退治してくれるので、屋敷神様と呼ばれていました。

養蚕が終わり仏壇の前を掃除していたときのことです。仏壇の前の狭い所を大きな青大将がしっしっ通ろうとしていました。祖母の目の前でこの卵泥棒をいじめにかかったら、祖母が大きな声で、「青大将は屋敷神様だからいじめてはいけない」と注意されました。蚕が成長し、家の中が蚕でいっぱいになると私たちは二階へ移り住むことになりました。二階の天井裏には鼠がたくさん住んでいて、寝床に入り耳を澄ますと、鼠の大運動会が繰り広げられることがたびたびありました。ある夜、またもや鼠の大運動会と思いきや、急に静かになり物音一つしなくなりしました。「青大将が登場したな」と思ったことがありました。

(昭和十五年生まれ)

### 土間のある家

本家の玄関に入ると土間がありました。麦秋の頃、小麦や菜種を収穫すると、庭の土間に一時収容していました。この時期は養蚕も最盛期で、蚕が沢山の桑を食べるので畑で摘んだ桑を庭の土間に収めていました。土間には桑に付いてきた毛虫やムカデなどもいて気味が悪かったです。

本家の隣には離れ家があつて、農閑期に藁仕事が出るよう整備されていました。縄・びく・藁草履・むしろなど、野良仕事に必要な品はほとんど自家製でした。

(昭和四年生まれ)

### 風呂

我が家で風呂を沸かしたときは、ご近所へ「お風呂が沸いたかどうかやあ」といつて呼びかけたものでした。ご近所付き合いはお互いに大切にしていました。

(昭和十三年生まれ)

私の子どもの頃、毎晩風呂に入るようなことはできませんでした。月に二〜三回わかす程度で隣にも風呂をわかしたと連絡をして相互に往来したものでした。

(昭和十五年生まれ)

## 家

私の住む地区に三〇軒の家があり、そのうち瓦屋根の家が一軒、さらにそのうちに二階造りの家が七軒あって、いずれも屋根は切妻でした。残る家の屋根は草屋根と言って小麦の茅を乾燥した物を用いて葺いていました。草屋根は数年おきに葺き替えなければならぬので、小麦の茅を保存する大事な仕事がありました。どこの家も屋根裏（「ツシ」と言った）に、茅や薪を保存してました。

かまどで火を焚くので、初期消火なども考えて夜寝る前に水瓶を満水にしておくよう親は言いました。かまど（「クド」と言った）について、昭和初期は和くと（煙突がなく土を焼いて焚口が二つあるもの）が多かった。昭和十五年頃より西洋くと（煉瓦を長方形に積んで造り、中段にロストルを入れて焚口には開閉式の金の扉を付け、下から空気を入れて煙突に出すもの）に移行しました。

## 縄・草履作り

どこの家にも、離れに藁仕事が出来る小屋がありました。祖父とか親父が天気の良いときや農閑期などには必ずこの小屋で藁仕事をしていました。わら草履はこの時代、農作業に欠かせ

ない履き物でした。私が子どものころ靴などは当時なかったので、たいていの子はわら草履を履いていました。家には縄を作る機械があつて、主に藁でつくった自家製の縄は沢山ありました。収穫した物の入れ物や、田畑へ肥や土を運ぶのに必要な「びく」をはじめ、農作業に必要な物は、ほとんど自分たちで作っていました。

## 病気や怪我をしたとき

当時は、近所に医院がなく、小さい頃、二階から階段を踏み外し、肩を脱臼した時、親父が自転車で遠くのお医者さんへ連れて行ってくれたことがあります。

富山の薬売りは、ずいぶん昔から知られていました。お土産の紙風船を懐かしく思い出します。腹痛には御嶽山の「百草丸」、蚕の桑取りなどで毛虫にやられたら「塩」をぬっていました。

「マムシ」を生きのまま捕獲し、一升瓶に入れ焼酎漬けにしてみました。子どもの頃、これを傷口に塗り治療に役立てていました。「赤チン」とか「ヨードチンキ」なども切り傷の薬として役立ちました。「アカギレ」や肩こりなどには、一宮の「浅井膏薬」がよく知られていました。

## 第二節 通過儀礼と家庭生活

### 通過儀礼

通過儀礼とは、人が一生のうちに経験する、誕生・成年・結婚・死亡など、年齢的に重要な節目にあたっておこなわれる儀礼であり、大口町においては、かつてどの家も儀礼用のお膳を所持し宴席を設けることができた。時代とともに、その煩わしさから宴会場を使うなど利便性と簡素化を優先した結果、儀礼の省略や多様化を生んだ。

### 出産前後の産育儀礼

**帯祝い** 妊娠五か月目の戌の日を選び、実家から帯が贈られ、妊婦が腹帯をしめる。一九八〇年代までは、祝い餅について近親に配ることもあった。一九九〇年代以降は、戌の日でも大安の日を選んで贈られた帯を持参し、妊婦とその家族そろって安産祈願に出かける家庭が多い。

**里帰り** 妊婦は出産予定の七、八日前に赤飯を携え実家に帰り出産に備えた。特に、第一子は実家で出産する習慣が

あった。一九七〇年代頃までは、産後一週間程度で自宅に戻り、農作業や家事をおこなった。一九九〇年代あたりから、出産予定日の一か月前に実家に帰って出産に備え、出産後、少なくとも一か月検診を受診してから自宅に戻るの

が一般的になった。

**七夜** 産後すぐに亡くなってしまいう子どもが多かったため、生後七日目になると祝い、子どもに名前をつけた。「名づけ」は家庭によって異なるが、「よい画数」を調べて決めたり、名前にはあまり使われていない漢字をあて、簡単に読めないような名前を付けたりするなど、命名にも多様化が見られる。

**初宮まいり** 男児は三十二日目、女児は三十一日目（家によって多少異なる）にそれぞれ盛装し、父方の祖母がつきそって氏神様に参拝する。

**破魔矢** 産後初めての正月は、初児に限って男児は破魔矢が、女児に羽子板が実家から贈られ祝福をうける。

**お食い初め(箸ぞろえ)** 生後一〇〇日目、一一〇日目、一二〇日目のいずれかの日に「クイズメ」という膳につかせ、生育を祝い、今後の健やかな成長を願う。一九八〇年代までは、実家から子どもにも膳部一式を贈る習慣もあった。二〇二〇年前後から、「お食い初め」に対応する飲食店も現れた。

**初誕生** かつて一年目の誕生日には、「誕生餅」を近親者へ配り、お返しに足につける品物(タビ、ゲタ)をもらう習慣があった。「誕生餅」は「一生餅」とも呼ばれ、一升のもち米をつけて餅を背負わす。一生食べ物に困らず、健康を願う。内々で祝うようになったが、二〇二三年現在も「誕生餅」を子どもに背負わす習慣が残っている(3-1-9)。

**節句祝い** 初節句の際、実家から女兒は「ひなかさざり」が、男子は「幟」が贈られた。一九九〇年代に入り、住宅事情や簡素化の風潮により、「ひなかさざり」「五月人形」など節句にまつわるものは小型化していった。なお、一九六〇年頃までは、男女を問わず「ひなかさざり」を贈る習慣があった。

### 初誕生の新しい儀式

二〇〇〇年代からアメリカで広まりつつあった「スマッシュケーキ」と呼ばれる、初めての誕生日に手作りケーキ(スポンジに食パン、生クリームの代わりにヨーグルト、イチゴやバナナをデコレーションしたケーキ)を手づかみで食べさせ写真を撮る習慣が、日本にも入ってきました。平成末から令和にかけて、出産した友だち数人から聞きました。

私の子どもも、初めての誕生日を迎えました。一升の餅をリュックに詰めて背負っている孫の姿を見て、両親は穏やかに笑っていました。そのあと、私が作った「スマッシュケーキ」を息子が楽しそうに手づかみで食べている姿を、夢中で写真を撮りながら、作ってよかったなあと思いました。

(平成三年生まれ)



3-1-9

上：誕生餅(リュックに餅を入れて背負う)  
下：スマッシュケーキ

### 餅背負い

孫の一歳の誕生日が近くなり、娘が「時間あけておいてね」と言ってきました。餅背負いとか、するのかな？ かわいい孫のためなら、自分が餅をつこうかな。でも、「餅をついてほしい」とは言っていないから買うのかな？ しかし、一升の餅って二キロくらいか。餅を背負う孫も大変だなあ・・・などと思っていたら、当日孫が背負っていたのは・・・「一生餅」ならぬ「二生パン」でした。大きなパンを背負った孫を見て、時代は変わったなあと思いつつ、何を背負ってもやはり孫の姿はかわいいのでした。

(昭和三十七年生まれ)

### アワビを食べると

妊娠中のある日、母が食卓に焼いたアワビを出してくれました。母が言うには、「身ごとってからアワビを食べると、目のきれいな子どもが生まれる。私も大口に嫁いで、義母が食べさせてくれた」とのことでした。生まれてきた子は、目がクリクリしていて、母はとても喜んでいました。

(平成三年生まれ)

### 成人の祝い

一九四八（昭和二十三）年七月、国民の祝日に関する法律が施行し、一月十五日を成人の日と定めた。これにともない、地方自治体ごとで成人式がおこなわれるようになった。当時の大口村でも制定後、初の成人の日に大口南小学校講堂において成人式がおこなわれた。その様子は不明だが、女性が振袖を、男性がスーツを着て出席するようになったのは、一九五〇年代後半以降である。

一九九九（平成十一）年から大口町では、新成人による実行委員会方式を採用し、「成人の集い」という第一部は式典、第二部は同窓会を兼ねた二部構成の催しとなった。二〇〇〇年代に入ると成人式の会場内でトラブルが発生するなど混乱もあったが、町では一足先に実行委員会方式にしたこともあり、そのような混乱はなかった。

なお、二〇〇〇年からのハッピーマンデー制度の導入にともない、一月の第二月曜日が成人の日となったが、町では、その前日にあたる日曜日に式典を開催している。

二〇二二（令和四）年の民法改正により、成人年齢が十八齢に引き下げられたため、町では「二十歳の集い」に名称を変更した。

## 婚姻

一九六〇年代半ばまで、近隣の神社で挙式をおこない、披露宴は各家で催すことが多かった。挙式前に新婦を家に招き入れ、式場に向かう際に近隣住民のお披露目を兼ねて、餅や菓子をまいた。これを「嫁入りの菓子まき（菓子投げ）」などと呼んだ。家から娘を嫁がせる際にも、同様に菓子まきをおこなった。

一九七〇年代になると、挙式会場と披露宴会場が一体化した結婚式場ができた。これは披露宴において家での宴席準備から解放されることになるため、大いに利用された。「婚礼に菓子まき」をおこなう習慣はおおむね、一九九〇年代に入ってしばらくすると見られなくなった。

コラムでは、一九六〇年代以前の結婚式の様子や風習を紹介する。結婚式の前日、荷物を運ぶためのリヤカーを新婦の家に届けるところからはじまり、当日は午前中に荷物の引継ぎとともに新郎と新婦の親戚代表が新婦を迎えに行き、午後には新郎の家へ到着した。そして、新郎の家で結婚式及び披露宴をおこない、翌日、新婦の実母が新居を訪問するまでの流れがよくわかる。

## 嫁入り

## 結婚式の前日

新婦の持参する荷物を運ぶため、リヤカーを三台くらい新婦の家へ届けます。

## 荷物の引継ぎ

結婚式当日の午前中、新婦の親戚が嫁入り道具を積んだリヤカーをひいて、前もって申し合わせた時間・場所（新郎の家と新婦の家の中間点。目標のある場所）へ行きます。そこでは、新郎の親戚数人が酒肴しゅこウを用意して振る舞い、新婦側は荷物を引継ぎして、新郎方に納めます。

## 新客

荷物の引継ぎと同じくらいの時間に、新郎と新郎の親戚代表二人くらいが新婦の家へ新婦を迎えに行き、祝膳の振る舞いを受けて帰ります。それから午後になり、新婦が新郎の家に到着した後、新婦の実父と親戚代表二人くらいが、新郎の家に出席して披露宴に同席しました（当時は新婦が営業車を利用し、他の者は自転車で往復しました）。

## 結婚式

仲介人の付き添いで（当時は仲介人を立てることが常識であった）新婦が新郎の家に着くと、座敷に上がる前に準備してあつ



た藁草履の上に足を乗せ、帰ることのないようにと草履の鼻緒を切って、母屋の屋根に投げるといふ習わしがありました。座敷に上がった新婦は、仏壇の前に進み、ご先祖様にお参りをし、三三九度の盃を交しました。記念写真が終わると新婦はお色直しをして披露宴の席に着きます。

### 土地の習わし

結婚式の夜、新郎の家が祝宴で盛り上がっている頃、新婦が永く居座るようにと、地区の若者達が弘法堂にある石仏を数体運んで新郎宅の玄関先に並べます。新郎の家は翌朝、「ぼた餅」を作って石仏に供えた後、石仏を元の位置に納め、家族や居合わせた者で「ぼた餅」を食べました。また、結婚式や初老祝などの祝膳の最後に、良いことが長続きするようにと、うどんを出しました。

結婚式の翌日、新婦の実母が部屋見舞といって新居を訪問しました。  
(昭和十一年生まれ)

### 嫁入り道具

タライには下タライと言って、一寸と小さめの物があり、これで子どもの「むつき(布おむつ)」など汚れた物を洗いました。嫁に行く時、タライ・半ぞうは持参する必要道具でした。

(昭和十五年生まれ)

### 葬儀・祭祀

**葬式** 婚姻同様、葬式も自宅(集会場など)でおこなうことが一九八〇年代まで普通だった。家人が亡くなると親戚・縁者に知らせるとともに、檀那寺(だんなでら)に連絡し葬儀の日時を決める。近所の住人(隣保班・組)がその家に集まり、長老の差配により役割分担をされる。これらの人々を「とりもち」と呼び、喪主は「とりもち」の協力のもと葬儀をおこなった。

葬儀が終わると「とりもち」、僧侶らをねぎらうために酒と料理を準備した。この時に作る味噌汁について、尾張北部では臭いからネギを避けたところが多く、余野地区では普段の食事と逆にするため、味噌汁に白菜・豆腐・油揚げなどを入れ、砂糖を加えて甘くした家もあった。翌日の夜には、近親者・近所の人が葬家の仏前で読経・念仏を唱えた。これを「無常講」と呼んだ。

これら一連の行為も、一九九〇年代に入ると葬祭場ができ、多くの家は自宅で仮通夜をおこない、翌日に葬儀社の手配のもとに通夜・葬儀がおこなわれ、近所の住人が手伝うことは少なくなった。さらに、二〇一〇年代後半には近親者のみでおこなう「家族葬」も増え、葬祭場も家族葬専

用の部屋を設けた。

コラムでは、一九八〇年代以前、「とりもち」の人々が喪主とともにどのようなように葬儀を進めたのか紹介する。また、土葬だった頃でもあるため、自宅で葬儀式をおこなった後、墓地での埋葬までの様子もあわせて紹介する。

**埋火葬** 町内では古くから死者を弔う際、集落毎に墓地を持ち土葬によることが一般的であった。墓地は埋葬地に石塔を建てる地域もあれば、埋葬地と石塔を立てて参る場所が別にある両墓制となっている地域もあった。両墓制の場合、埋葬地には墓標が建てられ、檀家である寺の敷地内にも石塔を建てた墓が存在した。火葬が浸透しはじめると、江南市・犬山市など近隣の火葬場に依存し、両墓制の地域では遺骨を分け二か所に納めることもあった。

生活様式の変化や環境への配慮によって、一九七〇年代後半から、町内集落においても、火葬による対応が増加し、町内における火葬場整備の必要性が高まり、江南市や犬山市においては、火葬場の老朽による改修が急務となっていたことから、広域で環境衛生を完備した火葬場を整備する検討が始まった。

一九八六年二月十二日に、犬山市・江南市・岩倉市・大口町・扶桑町の三市二町で構成する尾張北部聖苑組合が設立され、一九八七年、犬山市善師野地内において火葬場建設に着手した。

尾張北部聖苑組合は、一九八九年四月一日から管理棟・火葬棟、翌年、九月一日から斎場棟の供用を開始し、それ以降はほぼこの施設での火葬となった。

一九九九年四月一日からは、尾張北部聖苑組合と構成市町が同じである、愛北衛生処理組合、尾北広域事務組合と統合し、愛北広域事務組合へ組織替えをした。

**法要** 宗派によっても異なるが、初七日・三十五日・四十九日・百か日・一周忌のあと、三・七・十七・三十三・五十回忌をおこなう。こういった法要を簡素化すべく、町内でも永代供養にする家が多くなってきている。

また、四十九日の法要後に忌明けのしるしとして、香典返しの品を送る際、砂糖を送ったが、軽量の食品やカタログギフトに代わり、二〇〇〇年代後半には会葬御礼の品とともに香典返しも渡されるようになった。

## 葬式（互助の精神・とりもち）

一九八〇年代まで、家人が亡くなると親戚・縁者、近所の互助組織（隣保班・講組（宗派毎））に連絡します。葬式の段取りは、それら互助組織の役員などが当家に集まり、慣例や長老などの差配により進められました。これらの人々を「とりもち」と呼び、喪主は「とりもち」とともに葬儀をおこないました。

「とりもち」となった者は、通夜や葬式当日の献立を相談し、材料の購入先や当番を決めて、本番に備えました。当日、朝から集まり煮炊きをして当家やその親族、僧侶や来客に昼食を接待しました。

喪主は、葬儀が終わると「とりもち」や僧侶らをねぎらうために酒と料理を準備しました。翌日の夜には、近親者・近所の人葬家の仏前で読経・念仏を唱える「無常講」をおこないました。一九九〇年代に入ると葬祭場ができ、自宅で仮通夜をおこない、翌日に葬儀社の手配で葬儀が進められるため、近所の住人が手伝う姿をあまり見ることが無くなりました。二〇一〇年代後半には近親者のみでおこなう「家族葬」が増えました。それにともない、葬祭場は家族葬専用の部屋を設けたり、家族葬のみあつかう葬祭場ができたりしました。

また、会葬御礼として缶詰め砂糖を贈る風習を持つ地域があ

りました。これは昔、それらの食品が貴重であったことからお礼として贈られていたと考えられ、生活水準が上がるにつれて、軽量の食品などに代わり、さらに二〇〇〇年代後半には会葬御礼の品とともに香典返しも渡されるようになりました。

## 葬儀

### 葬儀式

第二次世界大戦で空襲が始まる前までは、家での式の後、野辺送りの葬列を組んで墓へ行き、葬儀式をおこないました。墓に納棺して、身内の者が土や石を棺の上に少し入れた後は、穴を掘ってくれた人が埋戻して土盛をくれました（この様なことをする人がいなくなつてからは、「とりもち」で穴を掘ったり、埋戻しをしたりしました）。空襲警報が発令するようになってからは、家で葬儀式を済ませ、野辺送りの葬列を組んで墓へ行くようになりました。

### 喪主

喪主は袴はかま、喪主の妻は白の和服を着用しました。喪主は葬儀式が終わると墓の入り口で「こもお敷き」の上に座って低頭し、参列者にお礼を申し上げました（納礼と言った）。

### 祖母の葬儀

昭和二十七年に亡くなった祖母の葬儀式は、家で棺の前に供え物や飾物を添えておこない、野辺送りの葬列を組んで墓に納棺しました。

昭和四十三年に亡くなった父親の葬儀式は、葬儀屋が祭壇を家の中に組んで済ませ、野辺送りをして納棺しました。

昭和五十一年に亡くなった母親は父親同様に家で式をおこないましたが、当時、埋葬が禁止になり、江南市の火葬場へ送り出しました。

平成十六年頃より各地に葬儀場ができ、どの家も利用するようになりました。

### 互助

自宅で葬儀をする時は、隣組の班や組で「とりもち」をしました。前日に集まり、式当日の献立の材料を相談し、購入先も決めて、人の割り振りをして、本番に備えました。当日、朝から煮炊きをして僧侶や来客に昼食を接待しました。葬儀が終わると、遠方から来た客が自転車や徒歩で帰るため、空腹のぎに食事を出しました。葬儀の翌日以降は、念仏講や組があつて、初七日まで毎晩続きました。四十九日までは七日毎に葬儀のあつた家に集まり、念仏を唱えました。

一年の内に同じ家で葬儀が二回あると、三回目は無いように、これで打ち止めと槌つちを箕み（穀物を入れる道具）にのせて、棺と一緒に墓まで引く、「身を引く」という習わしがありました。

（昭和十一年生まれ）

### 講組の取り持ち

昭和二十三年から四十五年頃の葬儀は土葬でした。大口町所有の白木霊園の一面に埋葬する場所があり、講組といって葬儀を取り持つ二つの組があり、葬儀のない組が穴掘りをおこない、葬儀が終わったらきれいに埋め戻し、葬儀のあつた家で食事をして、お礼の品物をもらい帰ります。

葬儀のある組は、亡くなった日に集まり、役場へ死亡届を出して、お寺さんへ連絡し、葬儀の日時を決めます。

葬儀の日は朝早くから、はそりという大きな釜でご飯とお味噌汁を焚たき、親族関係者にふるまい、葬儀の準備をします。葬儀が終わわり、新しい仏にお参りをし、家族に食事をして頂き、隣の手伝いの方、講組と食事をして帰ります。次の夜は無常講といって葬儀のあつた家でお経を唱え、家の人は葬儀の「とりもち」のお礼に食事と引き出物を出して、喪主が葬儀のお礼を言いました。

## 伝染病対策

大口町が伝染病組合に加入したのは、一九一九（大正八）年八月のことであった。当時の組合は、犬山町・羽黒村・栗田村・池野村・城東村・扶桑村の六町村で構成し、大口村の加入により、犬山町外六ヶ村伝染病院組合と改称した。組合による伝染病院は、犬山町丸山に設置された。

組合に加入する前までは、伝染病患者は医院に入院するか自宅で療養し、伝染病が蔓延して患者が多くなった場合は、臨時的にバラック式の仮隔離病舎を建設して手当てを施していた。組合加入後は、主治医の報告により役場職員が隔離病院への入院手続きをおこない、患者を出した地区の委員と協力し、患者の家を中心に消毒して防疫にあたった。

一九五三（昭和二十八）年十二月、布袋町は大口村・千秋村・岩倉町と組合立丹羽郡伝染病院を設立し、愛北病院の隔離病舎を改築した。一九五八年には尾張伝染病院組合に改称し、一九七二年五月、二市二町（江南市・岩倉市・扶桑町・大口町）による隔離病舎が全面改築され（3-1-10）、一九七四年に犬山市が加入した。

一九九八年、感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律が制定され、伝染病予防法が廃止された。伝染病院

組合の事務は県に移管し、愛北病院の伝染病院棟は廃止後、春日井市民病院内に新設された。

伝染病院組合と農業共済の事務を担っていた尾北広域事務組合は、一九九九年（平成十一年）四月一日に愛北衛生処理組合・尾張北部聖苑とともに統合し、愛北広域事務組合と名称を変更した。



3-1-10 全面改築された隔離病棟（『大口広報』1972年5月号）

## 第三節 地元意識の変化

### 町内会の各種役員

地域によって差異はあるが、町内にある集落の最小単位を隣保班、隣保班の集合体を組、組の集合体を大字と称して集落を形成していた。

隣保班は、日常生活の中で助け合い、普請（建前）、葬式などの時はお互いに手伝いをした。

大口村誕生以来、大字ごとに区長が選出され、組ごとに総代（惣代）、隣保班には班長など年番の役が置かれた。区長は、推薦によって選出されるところが多く一年で交替した。総代は組の代表であり、隣保班の班長は順番で回ってきて、種々の行事の計画、あるいは連絡をおこなうとともに、行事進行の中心となった。このほか、宮年番・寺年番（年行事）などの役もあった。

これらの役目は、それぞれの役割に応じた書類や道具を管理し、総会の日をもって、引き継ぎ交替した。交替は概ね四月一日と定めているところが多い。

### 町内会

向こう三軒両隣は大切。遠い親戚より近い他人が頼り。昔からよく言われました。壁隣のおつきあい、めでたい時、悲しい時など親戚以上に深くおつきあいでいました。親父が「今晚風呂を沸かすから、風呂に入りに来てちょう」と隣に伝えて来いと言われて、走り回った記憶があります。風呂がすむと火鉢を囲んで、お茶を飲みながらしばらく談笑したものでした。

部落の寄合が集会場で開かれると、世間話や作柄の話をして親睦を深める場にもなりました。年一回の町内会総会では、役員が各家庭をまわり、集めたお米を大きな釜で炊き、総会が終わるとみんなでご飯をいただきました。大したおかずはありませんでしたが、ご飯は何杯もおかわりました。

田植えは、一家総出での苗取りから始まります。夜明け前の作業で大変厳しかったです。植え付けが終わり、苗田を片付けると一息つきます。遅れている農家があれば応援に駆けつける、互いの絆は強かったです。

（昭和十一年生まれ）

## 女性の就労

一九五〇年代の大口村は、大半が農家だったため、老若男女を問わず家族全員が貴重な労働力であった。まだ農作業を手伝うことが難しい小学校に入学前の子どもは、保育所（現保育園）に預けることにより、家族にとっては安心して働くことができた。

一九六〇年代には、農業の機械化・兼業農家の増加もあり、朝、子どもを保育園や学校に送り出した後、農作業の手伝い・内職・短時間のパートタイマーとして働く女性が増えた。企業も、工場の昼休憩時に、正規労働者に代わって生産ラインに入る労働力として女性を雇った。こうした働き方で、子どもが学校から帰る時間には家に戻ることができた。

子どもが大きくなり、仕事も熟練すると、より長い時間働くようになった。働き先は、町内の企業・工場、町外にも働きに出るようになり、正規職員として活躍する女性の姿が目立つようになった。

### 一九七〇年代の「パートさん」

経済的にも苦しかった。下の子どもが三年生になった頃、そろそろ子どもに手がかからなくなったので働き、少しでも家計の足しにしたいと町内の会社に入りました。技術部で働いていた事もあり、その経験を活かし採用されました。

新規に大学卒を大量に採用し、とても活気に満ちて他社に負けず、工場のロボット化を目指して前途洋々としていました。また、手で図面を書いてはダメだと名古屋IBMでCADMを使った図面作成と図面管理を見学し、時代の進歩に目を丸くしました。

しかしその年、何故か六〇人あまりのパート、派遣社員の解雇がありました。残酷にも切り捨てられた人たちは、泣く泣く他社に移動せざるを得ませんでした。そんな事があった年の暮れのゆく年くる年に、技術部長がFMFロボット工場の輝かしき成果を自慢げにテレビで発表されていました。

その数年後、他社でも正社員のリストラの風が吹き荒れた事がありました。優良企業が沢山あって解雇されても働く所があることはありがたいとは思いますが。

（昭和二十年生まれ）

### 独特な地元意識の醸成

町内は、歴史的に主要な街道が通っていたわけではなく、公共交通機関にも恵まれていなかった。このため、長年、純農村地帯が続き、人口の流入も少なく、周辺自治体に比べると、新しい情報に触れる機会が乏しかったと思われる。以上のような環境の中、町域は、独特で保守的な意識が醸成されてきた。

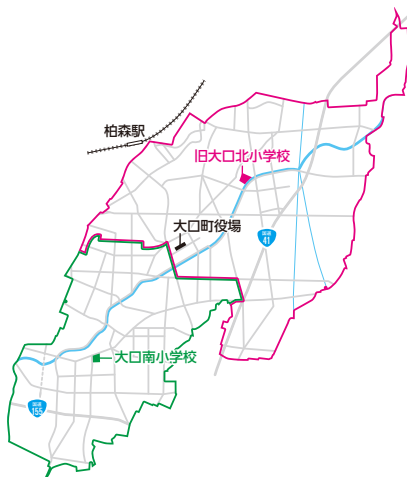
### 南部・北部の意識

社本鋭郎しゅもとえつろう村長が五条川に桜を植樹する活動（第二編第二章第一節）は、住民の憩いの場となるよう、そして、いわゆる「南部・北部の意識」を解消し、村民に一体感を持つてほしいという願いが込められていた。

この意識について、南部は旧大字で表すと、秋田・豊田・大屋敷であり、北部は外坪・河北・余野・小口となる。これは、大口西小学校ができる前、二つの小学校区と重なる。二つの小学校とは、富成村・小口村・太田村が合併して一九〇六（明治三十九）年に大口村が誕生し、その翌年に設置した大口第一尋常高等小学校（後の大口南小学校）、大口第二尋常高等小学校（後の大口北小学校）のことである。

設置後、約七〇年間にわたり続いた二つの小学校の校区が、南部と北部という地域的意識につながった（3-1-11）。その他の要因として、大口町役場の北側を東西に延びる道路を境に、行政・施設の状況が異なることから、物理的に南部と北部に分けられていた。

この意識は、一九七六（昭和五十二）年に大口西小学校が開校し小学校が三校になったこと、都市化や世代交代によりそもそも話題にする人が少なくなったこと、地域格差のないまちづくりと道路網の再整備により、町内を不自由なく移動できるようになったことで、「南部と北部との意識」は次第に過去のものとなり、地理的意味で使われるようになった。



3-1-11  
大口西小学校開校前の小学校区図



### 校区とは違う南部と北部

私は、昭和二十五年に大口に嫁いできましたが、南部と北部という意識があるという話は知っていますよ。確かに、北小学校と南小学校の校区で「南部と北部」って分かれているから、それも要因かもしれませんね。

でもね、昔は今の町民会館あたりに役場があったでしょ。その横の伝右から余野へ向かっていく道、これが南部と北部の境界線みたいな印象があります。この道を境に電話の回線が違っているとか、電気も布袋からくるものと小牧からくるものがあると聞いたことがあります。行政というのか施設というのか、そういうものが別々になっていることもあって、南部と北部という意識が芽生えた要因も、きっとあるのだと思いますよ。

「町長さんは南部の人がなつたら、次は北部から」とか「一方に新たな施設ができたなら、もう一方にも」といった対抗意識みたいなものも、今では聞かなくなりましたね。(大正十五年生まれ)

### 川遊び

今の総合運動場のあたりは、五条川が大きく蛇行して堤防治いの両岸に小山がありました。小学生の頃、「戦争だ！」と言って南小と北小の子どもが川を挟んで石を投げあいしました。危な

い遊びも、当時は当たり前でしたね。中学に入学するとお互い最初はきこちなくても、すぐに仲良くなりました。(昭和十九年生まれ)

### 友だち

小学校の頃の友達といえば、同じ南小の同級生くらいだから校区内で遊ぶことが多く、北小の子とは塾で一緒になっても話すことはありませんでした。

中学校に入學してから「一緒に塾だったよね」と言うのがきっかけて仲良くなるとか、クラスや部活が一緒になることで徐々に仲良くなりましたが、最初は「南小と北小、どちらが偉い」とか言い合っていた記憶もあります。(昭和三十八年生まれ)

### 愛着

西小学校から大口中学校へ入学しましたが、西小学校に愛着はあっても、それを口に出して言い争うこともなく、私も友だちも中学校生活に自然になじんでいったと思います。

(平成十四年生まれ)

## 呼び名

個人を呼ぶとき、例えば「○○さんちの子」と呼ぶことがあった。「○○さん」は親ではなく、祖父または曾祖父の名前で、「○○さんちの子」は「○○さんの家の子」という意味であった。戦前における家長制度の名残だと思われる。呼ばれた子どもにとっては、会ったことも名前も知らない曾祖父の名前を言われて返事に困ることがあった。一九七〇年頃から徐々に「○○さん」の名前が親の名前に代わっていった。また、屋号で呼ばれることもあり、呼ばれた子どもは、「自分のうちは、お店屋ではないし、昔は商売をしていたなんて聞いたこともない」と困惑した。屋号の例として多いのは、一九五〇年代まで農家が桑問屋を営んでいた頃のものである。最盛期にはひとつの集落で桑問屋が二件あった。桑問屋からほかの事業に代わっても昔の屋号で呼んだ。このほか、酒造業の屋号も聞くことがある。江戸時代に庄屋もしくは大地主であった旧家をさし、「○○様」と呼ぶ慣習も一九八〇年代頃まで存在した。これらの呼び名は、人口規模の小さな農村において、互いに農作業を助け合って暮らしてきたつながりの深さと、どこにどんな家族が住んでいるのか把握できた頃の名残といえる。

## 個人ではなく家

私の子ども頃の頃（戦中戦後）は、おじいさんとか、ひいおじいさんの名前で「○○さんちの人」などと言われて、どこの人の話か全く分かりませんでした。

あと、昭和の終わり頃まで、昔、大地主だったとか先祖が庄屋さんだった家の姓に様を付けて「○○様」と呼んでいました。○○家一族の始祖という感じで、敬意をもって呼ぶという意味もあったのですね。

（昭和十一年生まれ）

## 屋号

ほかの町から大口町に嫁いで驚いたのが、「○○（屋号）の家嫁かね」と呼ばれたことです。お店をやっていたわけでもないのに屋号があることにも驚きましたし、ほかに嫁ぎ先の祖父の名で「○○さんとこの嫁さん」と呼ばれたりしました。実家の方では義父の名で「○○さんとこの嫁さん」と呼ばれていたため、カルチャーショックでした。すぐに慣れてしまいました。が、なんだか懐かしい思い出です。

（昭和二十二年生まれ）

## 来た人（キタリド）

町域は、昔から農業が主体の集落で構成され、どこの農家でも祖父・父母・子どももの三世代で、先祖から受け継いだ田畑を守ってきた。代々町内で生まれ育った人たちは「地下<sup>じげ</sup>の人」と呼ばれ、地域の決め事を先代から引き継いできた。

やがて工場誘致が進み、町外から働くために転入してきた人や、名古屋のベツドタウンとして町内に居を構える世帯が増え、一九六〇年代には人口増加率は一〇%台となった（三一―一十二）。そこには、地域の決め事を守ろうとする「地下の人」が、新たな住民を「来た人（キタリド）」と称して地域に溶け込んでくれるのか憂慮する姿があった。

	1950	1955	1960	1965	1970	1975	1980
総数（人）	8,695	8,552	10,163	12,248	14,898	15,894	16,195
男（人）	4,316	4,252	4,580	5,809	7,025	7,630	8,158
女（人）	4,379	4,300	5,583	6,439	7,873	8,264	8,037
世帯数	—	1,580	1,887	2,444	3,067	3,677	4,637
増加率（%）	-1	-2	16	17	18	6	2

3-1-12 町の人口の推移（『国勢調査』） ※表中「—」はデータなし。

一九九〇年代からの住民参加のまちづくりの中で、このような意識は薄れていった。

### 町民になって四十数年

私は大学卒業後に実家を出て、大口町の企業に就職しました。その後、縁あって大口在住の女性と結婚し、妻の実家近くに新居を建てました。妻が元々町民だったため、地域の皆さんは私に対して気さくに接してもらい、私も地域の皆さんからいろいろと教えていただくうちに、親しさの度合いが深まりました。

しかし一方で、会社の同僚が大口町内に家を建てて暮らし始めると「来た人だから」仕方ないですよ、わからないですよ。と、よく言われたそうです。このため、同じ地域に引っ越された方に対して私なりに気配りをしてきたつもりです。最近では、そのようなことはなくなってきたと感じます。

（昭和二十二年生まれ）

### 共存

昔から住んでいる人達と新たに大口町に住み着いた人達が共存する集落が増え、悩みというか問題も色々あるように見受けられます。しかし、地域の伝統を維持しつつ、新たな地域活動

が新しい住民を巻き込んで盛んになってきたと感ずます。区長も、昔から住んでいる人が就任するのが当然という考えも、今では無くなりつつあるようです。  
(昭和十一年生まれ)

外国人居住者の推移

町内に暮らす外国人の様相が大きく変わったのが、一九九〇（平成二）年からのブラジル人の増加と、その後のペルー人の増加である（3-1-13）。

一九八〇年代後半、好調な日本経済にあつて、労働条件の厳しい職種を中心に人手不足が深刻化し、外国人労働者に対する期待が高まった。一九九〇年六月、入国管理法が改正され、「長期滞在査証」（三年間の査証）と称する特別の資格を日系移民の子または孫であることを証明した者、もしくはその配偶者にまで広げた。これにより、南米から日本に就労のため来日した人が激増した。町内でも主にブラジルとペルーからの日系人二世・三世の居住者が急増した。

しかし、二〇〇八年、いわゆるリーマンショックによる世界的な株価の下落・金融危機・不況により、日本でも広

	1975	1980	1985	1989	1990	1991	1992	1993	1998	2003	2008	2012	2014	2016	2018	2020	2021
総数	26	31	40	54	158	251	259	305	440	303	451	457	408	397	538	664	664
韓国										34	39	34	32	33	41	36	34
朝鮮									45	8	3	2	2	3	4	3	3
中国	2	1	24	20	17	26	12	49	38	55	137	167	160	135	166	163	138
ブラジル					105	145	183	190	279	129	133	115	90	78	98	91	89
フィリピン				7	7	18	15	10	12	25	41	46	32	32	38	74	75
ペルー						1	2	12	40	22	30	32	18	19	18	23	25
ベトナム													36	52	118	193	211
その他	1	3	0	1	1	32	12	9	26	30	68	61	38	45	55	81	89

3-1-13 町内に住む外国人の推移

※1975年～1989年：各年3月31日現在。1990年～1998年：各年12月31日現在。  
 ※2003年～2012年：各年4月1日現在。2014年～2021年：各年1月1日現在。  
 ※2012年7月から在留管理制度の変更のため、外国人登録は中長期在留者制度に変わった。  
 ※1975年～1998年：『愛知県統計年鑑』、2003年～2021年：『大口町の統計』。  
 ※表中空白はデータなし。

範な雇い止めがおこなわれた。国は、失業者対策として帰国費用の一部を支給する措置を取り、約四割の日系人が帰国した。町内でも、リーマンショック後、ブラジル人とペルー人居住者の減少がみられる。

これに代わってアジア諸国出身の技能実習生や留学生の就労などにより、中国・ベトナム在住者が増加している。

### 多文化共生とまちづくり

二〇一九（令和元）年十二月二十日に関係閣僚会議において決定された「外国人材受入れ・共生のための総合的対応策（改訂）」では、生活者としての外国人に対する支援として「やさしい日本語の活用に関するガイドラインの作成」「多言語自動音声翻訳」「災害時の情報発信と支援」などの取組みを実施するとした。

大口町でも、第七次総合計画に「多文化共生・交流」の項目を設け、重要な課題の一つとして国際交流事業・NPO団体との協働を掲げ、みんなで進める自立と協働のまちづくりで国際理解と多文化共生社会の推進に努めている。

町NPO団体サラダボールC.O.は、二〇〇五年に開催された愛知万博の理念を引き継ぎ、外国人の日本文化にお

ける生活をサポートし、日本人に対しては国際理解を促す団体である。二〇〇六年には、資源ごみ分別表を三か国語（英語・中国語・ポルトガル語、のちベトナム語を追加）に翻訳をした。

二〇〇九年に結成した、町NPO団体もやいは、町の国際交流事業で海外派遣の経験者のうち、有志のメンバーで構成された若い世代で組織され、海外派遣の参加者をサポートすることに加え、国際交流や被災地復興支援に関する活動をおこなっている。

二〇一三年には、まちづくりの担い手の活動・人材や活動の連携・交流の中枢を担っているNPO法人まちねつと大口が、サラダボールC.O.もやい・その他の多文化共生や国際交流事業をおこなっていた団体に呼びかけをし、個々の団体の活動を尊重しつつ、集まってやれることは一緒にやってやろうという考えのもと、多文化共生レインボーを結成した。

その後、二〇一五年に結成した、まちづくり団体愛知華人華僑国際交流会（日中友好の文化交流を中心に活動）や、二〇二〇年に結成した、まちづくり団体あいうえおOguchiも結成と同時に多文化共生レインボーに参加している。この

団体は、外国にルーツを持つ子ども達の日本語・学習支援とともに文化習慣の学び合い活動などをおこなっている。活動の対象は、外国で生まれて親と一緒に来日した子どもや外国人の親を持つ日本で生まれた子ども、帰国子女も含まれている。日本語での日常会話ができて、学習の場においては理解が難しい。そういった悩みを持つ子どもと親に寄り添う活動を大切に行っている。

それは、多文化共生レインボウの活動においても同じである。二〇一四年に、ワールドスポーツフェスティバル(3-1-14)、二〇一五年に日本文化体験会、翌二〇一六年には「たぶフェス(多文化共生フェスティバル)」を開催し、交流を主体とした催しを積み重ねてきた。二〇一七年には防災センターの見学会・防災訓練の体験といった生活に密着した催しにして、同じ町民として寄り添う関係づくりを大切に行っている。



3-1-14 ワールドスポーツフェスティバルの様子

## 第四節 余暇の過ごし方

農村における余暇の過ごし方は主に体を休めることであった。青年団では、野球や芝居などを楽しむことがあり、小口地区には芝居小屋があり旅回りの一座によって興行がおこなわれた。ほかにお祭り、ラジオ放送などが楽しみであった。

テレビの普及は、都市部では街頭テレビから始まり、一九五九(昭和三十四)年、皇太子殿下の御成婚パレードを機として家庭にテレビが、一九六四年の東京オリンピック以降、カラーテレビが普及し始めた。一九七〇年代には、多くの家庭にテレビが普及した。

大口中学校の学校日誌によれば、皇太子殿下の御成婚パレードや、東京オリンピックのマラソン競技が授業の一環として視聴された。

一九七〇年前後、ボウリングがブームとなりテレビでも中継された。町民も、隣接する小牧市・江南市・一宮市などのボウリング場に出かけていくようになった。一九八〇年代半ばからは、ゲートボールが普及し高齢者のスポーツ

として町内でも各地区で開催されるようになった。

また、暮らしの水準が徐々に上がり余暇時間が生まれたことや車社会の到来により、旅行やゴルフ、スキーなどにしかける町民も次第に増えていった。町内は高速道路インターチェンジに近く、活動場所が豊富な岐阜県や長野県に近接した立地から利便性が高く、余暇活動を後押しした要因である。

一九九〇年前後から、飲酒をとまなう飲食店に設置されていたカラオケが、町内や近隣市町において、安価で利用できるカラオケボックスとして営業されるようになり、気軽に楽しめる状況となったことから、多くの町民が利用した。その愛好者が増えたことで、町内各地区の学習等共同利用施設などにもカラオケセットが置かれ、地域でカラオケを楽しむ様子も見られるようになった。その後建設した健康文化センターや、再整備した老人福祉センター憩いの四季にも、カラオケが楽しめる場所を提供している。

二〇〇〇年代に入ると、新しいスポーツとして、ゴルフとマレットゴルフをミックスしたような、場所などに制約が少なく誰もが楽しめ審判を要しない、グラウンドゴルフが登場する。

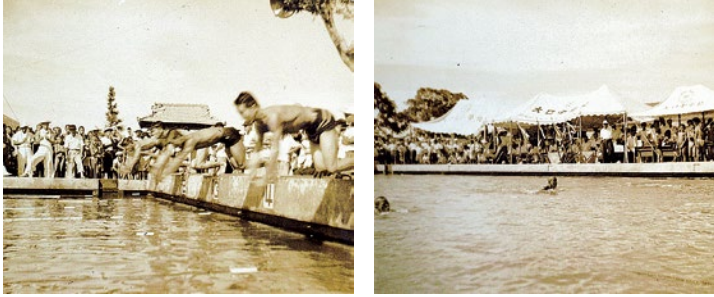
その手軽さから愛好者は一気に増え、地区や町全体など、曜日を変えて各所でおこなわれるようになり、健康づくり・生きがいづくりに寄与することとなった。

#### 大口村・大口町の行事

**水泳大会** 村主催の水泳大会は、一九五三年八月二十日に北小学校のプールでおこなわれ、その後、毎年開催された（3―1―15）。南小学校にプールが新設された一九五九年からは、南小学校と北小学校両校のプールが交互に会場となった。また、一九六四年に大口中学校にプールが新設されると、八月十六日に中学校のプールで町民水泳大会を開催した。一九八二年からは、温水プールでの開催となった。

**盆踊り** 一九五一年、大口音頭が作られ、九月三日月曜日の午後八時から、大口音頭のお披露目も兼ねて、中学校の校庭で村主催の盆踊り大会がおこなわれた。中学校の学校日誌によると、終了したのは午前〇時三十分とあり、大変盛況であったことがうかがえる。これを機に、各地区で盆踊りが開催されるようになった（3―1―16）。

その後、時の経過の中で踊る人が次第に減少傾向となっ



3-1-15 村民水泳大会 (1954年)



3-1-16 豊田區盆踊り大会 (1954年)

たことから、夏の風物詩として継続するために、飲食の店を増やしたり楽器演奏や演舞などを組み込んだりするなど、イベント色を強めている地区もある。

町全体の盆踊りとしては、大口町商工会が主催する夏のふれあいフェスティバルが開催されている。

**体育大会** 町民体育大会を記録として確認できるのは、一九五一年十月二十四日付で書かれた大口中学校の学校日誌である。この日の記事には「秋季体育祭」と称し、午前は中学校内競技会、午後から村民体育祭がおこなわれたとある。この記事以前は村民体育祭、もしくはそれに関連するような記載はなく、例えば前年は、十月二十三日に「体育祭」、前々年は十月二十三日に「運動会挙行、午前八時半開始、午後四時二十分全演技終了」と、中学校生徒のみで開催された様子がうかがえる。

なお、中学校開校から二年目の一九四八年十月二十二日の学校日誌には「南北両小学校校内運動会ニツキ午前授業、午後ハ全生徒、職員參觀見学ヲナス」と記されている。

町民体育大会を中学校の体育大会と分離して開催するようになったのは、一九六〇年からであった(3-1-17)。一九八九(平成元)年からは新たに竣工した多目的運動場(総合運動場)での開催となり、一九九九年には、実行委員会主催としておこなわれるようになった(3-1-18)。





3-1-17 「いそげはつかねずみ」  
(演目の一種)  
(1984年町民体育祭)



3-1-18 準備体操  
(2007年町民体育祭)

### 村民体育大会の思い出

昭和二十七年ごろのお話です、私は大口中学校の教員をしていました。午前中は中学校の体育大会で、午後からは村民体育大会でした。

午前の中学生の種目は、陸上競技ばかりでしたね。

午後からの種目は、フォークダンスとか、わりとレクリエーション的な種目を取り入れられていました。社会教育にも精通していた杉山先生がおられたからでしょうね。

私も、午後からは湯茶の当番をしていましたね。当時の社本村長にお茶と羊かんをお出しすると、村長さんが「こんなに厚く羊かんを切っては、いけません」とおっしゃったんですよ。厳しい財政の中、自ら質素儉約に努めていることが分かりました。

(大正十五年生まれ)

### クラブ活動

公民館ができた当初は、クラブ活動が村主導であった。事業を五つに分け、教養部(定期講座)、図書部(図書の閲覧と貸出)、産業部(農業の講習と実地指導)、芸能部(映画・演劇鑑賞)、厚生部(体育レクリエーション・福祉・健康・防犯)といった活動をおこなっていた。公民館活動は、産業や福祉の分野も含んだ多岐にわたるものであった。

一方、公民館では、部屋の貸出もおこなっており、中には自発的にできた団体で、例としては、研農会・文芸クラブといったものがある。講座の受講生がグループ化し自主的活動に発展しつつある姿が見られる。

運動種目の場合、レクリエーションからスポーツ競技として、住民や職場からなる運動種目別の同好会に発展がみられた。大口町体育協会の発足当時、相撲・弓道・野球・陸上・バレーボール・バスケットボール・テニス・卓球・剣道・スキー・柔道・山岳・ソフトボール・ハイキングがあった。

特にソフトボールは、地区別対抗・事業所対抗の大会がおこなわれ、卓球も職場対抗の大会がおこなわれていた。

## コミュニティ活動

各地区には集会場があり、大口村公民館が設立されるとそれらは、公民館分館とされた。集会場が老朽化すると、一九七〇年代後半から学習等共同利用・供用施設を建設し、二〇〇〇年代前半まで公民館分館としての役割も果たした(3-1-19)。

一九八〇年代後半に入り、自治宝くじ助成制度を活用して、各分館に、行幸用テントやカラオケ設備、太鼓などが購入され、地域での活動促進を図っている(3-1-20)。さらにその後、その組織を活用した、自主防災会が設立され、それぞれの施設に緊急時の備品を配置している(3-1-21)。



3-1-20 大屋数学習等共同利用施設内カラオケ設備



3-1-21 大屋数学習等共同利用施設内防災倉庫



3-1-19 大屋数学習等共同利用施設

## 第五節 子どもの文化

### 子どもの遊び

学校の休み時間(放課)では、多人数で遊ぶことができるのに対し、学校からの帰宅後や休日などの遊びは、少人数の遊びに限られた。

戦後から一九五〇年代にかけての遊びは、川遊び・メンコ(シヨウヤ)・コマ・クギサシ・チャンバラといった屋外でおこなうもののほか、室内ではビー玉(カチン玉)・あやとり・お手玉・人形遊びなどが挙げられる。

特に、五条川や小川(水路)は水質もよく、一九五〇年代初めまでは川に入って泳ぐこともできた(3-1-22)。魚とりはドジョウ・アユ・ナマズ・ウナギなどを獲物とし、食べることもあった。秋には「カエドリ」という一定の距離で水をせき止めて魚を取る方法もあった。地区によっては、大人が地区にお金を納め、権利を買い取って魚を捕るが、捕り終わった後を狙って子どもたちが残った魚を捕ることも、よくある風景だった。

鬼ごっこことかくれんぼの要素を交ぜた「ポコペン」「だる

まささんが転んだ」などは、「ドロジュン（泥棒と巡査の略）・ドロケイ（泥棒と警察の略）」に転化した。子どもの自由な発想で、遊びも変わっていった。また、一九八〇年代までの小学生にとって、神社の境内や休日の学校の校庭でソフトボールをすることは、日常的な遊びであった。

一九七〇年代に入るとボードゲームや着せ替え人形・テレビ漫画の影響もあり野球盤などが流行<sup>はや</sup>った。しかし、これらの玩具は町内では購入できなかったため、近隣市町の大型ショッピングセンターへ行き、誕生日など子どもの特別な日に買い与えた。一九八〇年代に入るとテレビゲーム

が登場し、一九九〇年以降は携帯型のゲーム機も普及した。ゲームの内容も、簡単なパズルゲームから、複雑・多様化した。特に、タマゴからヒナを育てる電子ゲームは、子どもから大人まで大ブームになった。この時期になると、以前と同様に近隣市町の店舗で購入することに加え、町内にも大型ショッピングセンターが進出したため、そこで購入する家庭が増えた（第二編第六章第四節）。

二〇〇〇年代以降は、電子ゲームをパソコンや携帯電話でも遊べるようになり、長時間遊ぶことにより日常生活に影響が出るなど社会問題にもなった。その一方で、手軽に



3-1-22

上段：水遊び（1955年頃）

中段：魚取り（同上）

下段：カエドリ（同上）

伊藤泰一氏・画

遊べる対戦型のカードゲームも流行った。購入先は大型ショッピングセンターに加え、コンビニエンスストアも町内各所に立地するようになったため、手軽に入手できるようになった。

また、学校教育の中で一輪車に乗る取り組みが始まり、子どもたちは下校後や休みの日には、一輪車を練習する姿も見られるようになった。

### 伊藤泰一氏が描いた余野の思い出の風景

余野地区在住の伊藤泰一氏は、自身が子どもの頃の思い出の風景を絵にした。描いたのは一九五五年頃の余野地区の風景や、年中行事・遊びなど生活の一場面である。

当時は土地区画整理事業が始まる前だったため（第二編第二章第二節）、作品を見ると、現在は住宅街や公園となっている場所が、まだ森や田畑が広がる景観だったとわかる（3-1-23）。



3-1-23 上段：よのばし  
垣田方面をみる（1950年頃）  
下段：余野から役場までの道路（同上）

### 水遊び

男の子は「もっこ」といって、股間が隠れるだけの布きれをつけて泳ぎに行きました。泳ぎが終わっても洗濯はせず、ちよつとゆすぐだけで竿きよこに引っかけ簡単に乾きました。泳ぎ場は「湯ノ島」といって、北小学校のすぐ東の五条川にありました。ダムでせき止められ、自然のプールのようでした。いろいろな魚が泳いでいました。時には亀やへびが泳いで川を渡ることもありました。秋には、この五条川で「替え取り」がおこなわれ、大勢の子ども達が全身どろんこになって魚を捕まえていました。

（昭和十一年生まれ）

### 魚とり

#### ガラス瓶での小魚とり

水深三〇cmくらいの小川でピンを仕掛けます。ピンは裸電球を大きくしたような物で、頭の所が入り口となり、そこを布で縛ります。餌は繭の中の「むつご」で、これをフライパンで炒めて餌としてピンの中へ入れます。このピンを静かに小川の川底に沈めます。ピンにつけた紐ひもで大きめの石にくくりつけます。上流から餌のおいが流れてくるので、それを求めて下流からピンを目指して小魚がやってきます。ピンの中へ入ったら餌は

食べ放題。しかし、いったん中へ入ったら魚は外へ出られません。仕掛けてから五〜六時間後に見に行くと、ビンの中には鮎・諸子・シロハエなど小魚がいっぱい入っており、これを持ち帰り家で飼って楽しんだものでした。

### 鮎捕り

五条川の堰止めをしばらくあけてから再び止めて堰下の浅くなった所で泳いでいる鮎をとり、皆で焼いて食べました。

### 沢蟹捕り

沢蟹が多く生息する場所（青塚塚）で沢蟹を捕獲し焼いて食べました。

### ドジョウ

秋の収穫が終わる頃に、友達と田んぼの小さな小川でどじょう捕りをやりました。小川の水がなくなり、表面を歩ける状態の時、手で小川を掘り起こします。土の中からどじょうが出てきます。家で容器に入れて、その後、どじょうを味噌汁に入れて、通称「どじょう汁」として、食卓に出していました。

### ザリガニ取り

田んぼの中や、小川には沢山のザリガニがいました。子ども達は、捕まえた蛙の皮をむいて、その蛙の足を糸でしばり、1mぐらいの細めの竹に結びつけていました。これを小川の中、

またはザリガニの口元に垂らすと、ザリガニがこの餌をハサミで挟みます。これを釣り上げてバケツに入れます。

当時は、どこの家も卵をうませるため鶏を飼っていました。釣り上げたザリガニをひしゃいて鶏の餌にしたものです。

### カエル捕り

カエルの足を一本系にしばりつけ、それを1mぐらいの細い竹の棒に結びつけます。このカエルの足をエサにして、小川にひそむカエルの口元に垂らします。すると、このエサにカエルが一気に食いつきます。家から持ってきた丸い大きな布袋に捕れたカエルを入れます。当時は、カエルが沢山捕れました。家に持ち帰り、庭先の大きな釜の湯の中にカエルを入れます。カエルはニワトリのエサになりました。（昭和十五年生まれ）

### 戦後の遊び

#### シヨウヤ・カチン玉・釘刺し遊びなど

数人の子も達もってきた「シヨウヤ」を出し合って、地べたで交互に勝負します。相手の「シヨウヤ」をひっくり返せば、その「シヨウヤ」がもらえます。

「カチン玉」遊びは、地べたにお互いの「カチン玉」を置き、勝負相手の「カチン玉」にこちらの「カチン玉」が当たれば、

相手のカチン玉がもらえます。

「釘刺し遊び」は目的地を定め、大きめの「釘」を使って、地べたへ釘を突き刺す遊びで、目的地に早く到達した方が勝ちでした。

子どもの頃は神社が子どもの遊び場で、いろいろ工夫して遊んでいました。例えば、三角ベースを利用した「三角手野球」は狭い場所でも楽しめました。

### コマ遊び

鉄製のコマに糸をしっかり巻いて、しっかり回転させコマを放り投げます。コマの着地点でコマが回転していることが条件。その距離を競う遊びです。大変危険をとまなう遊びでした。

### 紙芝居

紙芝居のおじさんが、自転車の後ろの荷台に紙芝居の箱一式を積んで、週一回位、リンを振り振り、太鼓をたたきながらやって来ます。箱の中には駄菓子がいっぱいあり、子ども達を集めてから、まず菓子を売りつけます。一銭一円の時代。目標額を売ったら、いよいよ紙芝居の始まり始まり。最高潮に達した頃に、この続きはまた来週と、子ども達を楽しませてくれました。

### ゴムガン

Yの字になった木のまたを探し、そのまたの部分を取り取り

ます。Yの両端にさるまた用のゴムで強くしばります。そしてゴムの中央にベルトシートを結びつけます。右手で木の本体を持ち、左手でベルトシートに石を挟み、左手でゴム紐を力いっぱい引つ張って、パチンと手を離します。見事に小石が遠くへ飛びます。電線にとまっているスズメなどを狙ったものです。

### 杉鉄砲

細い丸い竹を用意します。そして押し出し棒を用意、出口側に玉を入れます。そして、入り口側にも玉を入れます。棒で強く押すと、筒の中の空気が圧縮されて出口側の玉が、一気に飛び出します。また、丸い竹を探し出すのが大変です。普通の竹では駄目でした。

(昭和十五年生まれ)

### チャンバラごっこに想う

小学生の頃、近所の子どもたちと林に入り、適当に竹や木の棒を拾い、チャンバラをして遊びました。しかし、二つ下の弟は、父からプラスチック製の刀を買い与えられて同年代の友達と遊んでました。私は昭和二十年代生まれ、弟は三十年代生まれ。チャンバラ遊びひとつとっても、年代の違いを感じました。

(昭和二十九年生まれ)

### 対戦型ゲーム

昭和四十年代の頃の思い出です。小学生の頃、兄や友達と野球盤で遊びました。友達の家に行くと、消える魔球付きの野球盤がありました。さすがに消える魔球を打つのは不可能なので、消える魔球はお互いに禁止していました。

パチンコ玉らしきものを転がして遊ぶゲームとしては、ボーリングゲーム、パチンコ玉を魚雷に見立てて相手の船に当てるゲームなど、よくやりました。高校生の頃には、テレビゲームがはやり始めました。今の子どもたちは、携帯電話でゲームをしたり、ゲーム機が小型化して持ち運びもでき、さらには対戦もできる。自由な発想で、自分で遊びを見つけていた時代が懐かしいです。

(昭和三十八年生まれ)

### 馬乗り

小学生の五年生だっただろうか、昭和四十九年の冬、教室で馬乗りという遊びがはやっていました。十数名でやるので、盛り上がりです。しかし、本来、外でやる遊びです。しかも、背中を傷めそうで、痩せているわりには足腰が丈夫だったらしく、人に乗られても結構平気でした。しかし、しばらくして、この遊びは危険だからと禁止になりました(3-1-24)。(昭和三十八年生まれ)

### たか 凧揚げ

冬の遊びで忘れられないのが、小学校の図工の時間に作った凧で、凧揚げをしたことです。残念ながら、私の凧は、紙がぶ厚かったせいか、全く飛びませんでした。そもそも、友達の揚がっている凧の糸を持たせてもらっている最中に、糸が切れて友達の凧をダメにしてしまったこともあり、大人になって思い出すたびに友達にすまない気持ちでいっぱいになります。のちに、西洋凧(ゲイラ・カイト)がはやりましたが、自分は興味が持てませんでした(3-1-25)。(昭和三十八年生まれ)



3-1-24 馬乗り (1950年頃) 伊藤泰一氏・画



3-1-25 凧揚げ (1950年頃) 伊藤泰一氏・画

## 子どもの頃の遊び

うちは上が女の子で下は男の子です。性格もあるとは思いますが、女の子はおうち遊びが好きで、皆でままごとをしたり絵本を読んだり、とても穏やかでした。

男の子はどんなに寒くても暑くても完全防備で外に出ていきます。小牧の四季の森によく行きました。ボールとバドミントンがあれば、なんにもない芝生の広場で何時間でも遊んでいました。遊具が揃ったきれいな公園も素敵だけど、小さな子どもが走り回って遊べる広くて安全な場所も増えて欲しいなと思います。

(昭和四十六年生まれ)

子どもの頃に流行ったものは、「オシャレ魔女♥ラブandベリー」です。アピタなどのお店にゲーム機があり、一〇〇円を入れるとカードが一枚出てきてダンスゲームをします。カードを沢山集めて、ラブとベリーをオシャレにしてあげます。男の子たちは、ムシキングのカード集めました。夢中になってカードを集めました。いくら使ったか計算すると恐ろしいことになっていました。

「たまごっち」も持っていました。お世話をしないとたまごっちが死んでしまうので、学校に行っている間は母親に面倒をみてもらいました。母親に甘えっぱなしでしたね。(平成十二年生まれ)

## お手伝い

農業を営む家庭の子どもは、恒常的に労働力の一部であった。一九六〇年代半ばまでは、小中学校で繁忙期に「田植え休み」「稲刈り休み」などがあった。

田植えと稲刈りは、家族だけでなく、親戚や近所の人々と協力しなければいけなかったため、手伝いができる子どもは大人とともに作業をおこなったり、田植えや稲刈りができない年齢の子どもの世話をしたりした。作業ができない年齢の子どもは、集落内の寺院で預けられたりもした。

田植え・稲刈りの時期以外にも、田の草取り・脱穀・藁切り・稲刈り後の麦蒔きまに向けた畝づくり、麦の収穫、畑で野菜の収穫、市場への出荷、家畜の世話などの手伝いがあったため、農家の子どもは忙しかった。農業の機械化や農業の縮小にともない、子どものできる手伝いは減っていった。

このほか、農家に限らず住居の中の手伝いとして、炊事・洗濯・掃除などがある。これらは住居及び家庭環境が変わったとしても時代を問わず存在している。



## 田の草取り

夏休みに入る頃、稲も成長し稲株も大きくなります。厳しい暑さの中、田の草取りが始まります。一番草を取る時は手押しをすると回転して稲の間の泥をひっくり返す草取り機を使います。二番草を取る時は小型の備中で稲株の間の土をひっくり返します。三番草を取る時は田んぼに這いつくばって、両手で稲の間の草を取り除き、足で泥田の中へ押し込みます。最後の田の草取りも同じ作業を繰り返します。この作業は、八月の猛暑の真最中におこなう大変厳しいものでした。さすがに昼食の後、三時間ぐらいいは昼寝をします。午後三時頃からまた田んぼへ出かけます。背中に蓑傘みかさをつけて我慢して田んぼへ入ります。田の草取りは農作業の中でも一番厳しい作業でした。腰が痛くなつて作業中に腰をあげ身体を休めていると、太陽はがんがん照りつけるし、自分だけが田んぼの中で取り残されます。母は何も言わないが親父がぶつぶつ文句を言います。太陽が西に沈んでもしばらく田の草取りは続きます。

夕方田の草取りが終わり家に帰ります。祖母が待ち構えたように「暑いのにえらかったのう」と慰めてくれます。いつも野良仕事を手伝って家に帰ってくると、タイミンク良く祖母は私達を慰めてくれました。

(昭和十五年生まれ)

## たまごとまくわうり

子どもの頃、私の家では鶏を飼育していました。岩倉にあつたひよこ屋さんからヒヨコを買うところから始まります。卵を産めるくらいまで育ったら一羽ずつケージに入れ、卵を産ませるのです。私の手伝いは、どの鶏が卵を産んだのかチェックすること。産んだ卵をバケツに集めてくること。集めた卵を水雑巾で掃除しながら箱に詰めることなどです。多いときで三〇〇羽くらい飼育していました。その時は、卵を毎日二〇〇以上集めていました。

日の入りが早くなると、鶏舎に電灯を付けて明るくしていました。鶏は明るい内はえさをどんどん食べてくれるのです。暗くなると休みます。たくさんえさを食べさせてたくさん卵を産ませようとしていました。

私が大学生の頃は、就職したばかりの兄はとても忙しくしていました。私の家は農家でした。父親は、減反政策で米作りをしないスペースに、スイカやピーマンやタマネギなどをつくつて、市場に出荷していました。両親は何かと「大学生は暇か？」と声をかけました。私は進んで手伝いをしました。また、マクワウリも栽培していました。朝の五時に起床し、両親が収穫して畝の間に置いた瓜うりをバケツに入れて、道ばたの軽トラクマでひたすら運び出しました。

(昭和二十九年生まれ)

あほう  
阿呆の綱引き

一年の内で最も忙しい季節は六月でした。麦の収穫と養蚕の時期が重なり、その上、田植えの準備に取りかからなければなりません。野良仕事は全く手作業で進められました。

収穫物を運ぶのに大八車が使われることもありましたが、私が子どもの頃はリヤカーが主流でした。「阿呆」といってリヤカーの前の所に太い縄を取り付け、この縄を肩にかけ犬が荷を引くように前のめりになって力一杯車を引っ張る役割がありました。なぜ「阿呆」と言ったのか分かりませんが、どこの家もこの「阿呆」の仕事はたいてい子どもがやらされていました。月の明かりを頼りに収穫した麦をリヤカーに山盛りに積み上げ、親父の引くりヤカーの「阿呆」をつとめて五条川あたりまで来ると、ホテルが無数に飛び回っていました。

(昭和十二年生まれ)

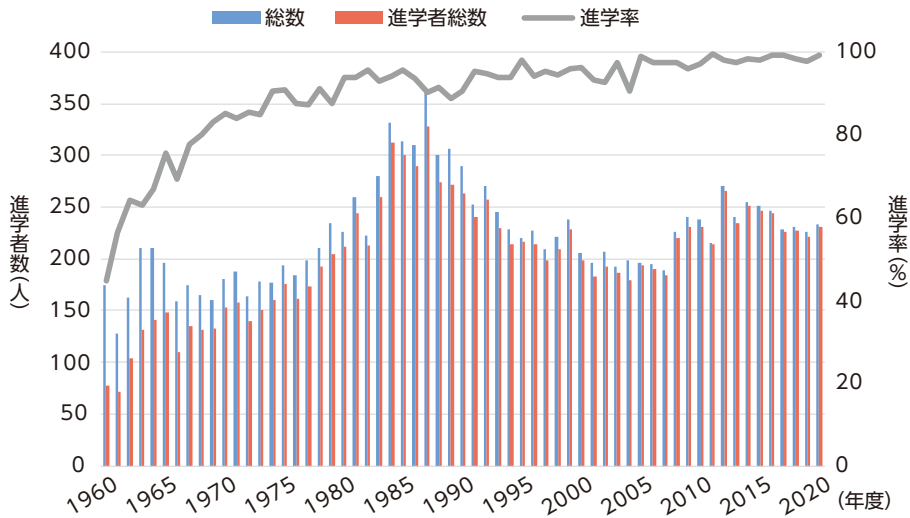
## 進学状況

一九五五(昭和三十)年前後、農家の子どもは滝実業高等学校の農業科、公立で安城農林高等学校を受験することが多かった。普通科志望の生徒は、私立高校の場合、自由に選択できたが、公立高校は学区制により、尾北高等学校

しか受験できなかった。そのため、一九五七年度大口村当初予算書を見ると、「尾北高校増築負担金二十万円」という項目がある。学区制が廃止されると、公立の普通科高校を志望する生徒は、家から自転車で通学できる範囲内に立地する高校へ行く傾向が強かった。一九七四年には、大口町と扶桑町の境に県立丹羽高等学校が開校し、その後も隣接市町に高校が新設され、ますます選択肢は増えた。公立・私立、自転車通学・電車通学、様々な選択肢の中で、高校進学の多様化がうかがえる。

一九六〇年から二〇一八(平成三十)年までの高等学校への進学状況(3-1-26)を見ると、進学率は、一九六〇年で四五%と低いが、一九六八年から八〇%台になり、一九七四年以降になると九〇%前後まで上昇した。その後は九〇%台で推移している。また、定時制高校への進学も統計の当初からあり、高等専門学校への進学も見られる。一九九〇年代に入ると、通信制高校への進学も現れ、特に二〇〇〇年代以降は一〇人以上が通信制高校に進学している。なお、全日制の高校が学年制で三年であるのに対し、定時制高校は単位制で四年、通信制高校は単位制で三年が基本となっている。この統計調査では、教育訓練機関等入学者・

専修学校・職業訓練校入学者は、進学者数に含まれない。



3-1-26 進学者数及び進学率の推移 (「愛知県統計年鑑」)

### 進学よりも就職の時代

昭和二十年ごろは中学を卒業すると、農業の後継者となる場合が多かったです。次男・三男は左官・大工・屋根瓦葺きといった職人を目指す人もいました。また都会へ出て商売人になるため、問屋に住み込み商いを修行する人もいました。従ってこの頃は高校とか大学へ進学する人は少なかったです。

(昭和四年生まれ)

### 企業内学校から大検、大学へ

昭和三十年代後半の思い出です。男三人兄弟で、第二人は家から通える距離の公立の普通科高校に通いました。

父の私への期待は大きく、私も父の期待に応えようと中学時代の成績は常に上位にいました。父の想いは、公立の普通科高校でも、少しランクの高い高校に通わせられたようです。そんな父の想いをよそに、中学校の先生から「君は成績優秀だから、力試しにこの試験を受けてみないか」と言われました。それは、高校ではなく大手企業の養成工となるための企業内学校というものでした。つまり、進学ではなく就職ということになります。早速、父に話をする。「随分、レベルの高い話をいただいてきたな。まあ、力試しに受けてみなさい」と言われ、受

けてみると合格となりましたが、その後が大変でした。

私は、普通科高校に進学するつもりでしたが、周囲の大人が許してはくれません。「そんなすこいところに合格したのなら、当然行くんだよね」という大人が多く、父も特に反対しなかったので、私は行くことにしました。

高校と同じ三年制で、一年目は座学、二年目からは現場に出て技術の修練が始まります。三年目には修学旅行もあり、普通の高校に通っているような感覚もありました。しかし、確実に違ったのは、大学入学資格検定（通称「大検」）を受ける人が多くいたことです。先輩の中には、大検で資格を得て東京大学に入学した人もいるほど、周りには秀才が多くいました。私も、遅ればせながら企業内学校の三年生の時に夜間高校（四年制）に入学し、夜間高校の三年目には大検を通過し、夜間高校の四年目には大学一年生となって、両方に通ったら面白いかなと想像していました。実際には夜間高校は三年で退学し大学に入学しました。

回りを道をしたものの、企業内学校で見分が広がったことは間違いないと思います。

（昭和二十一年生まれ）

### 新設高校

中学三年生になると、担任の先生から「新設校はいいぞ。先輩もいないし、新しい校舎に入れて、絶対にお勧めだぞ」などと言われ、すっかりその気になって言われるまま、その新設校に入学しました。

しかし、校舎の完成が遅れ、私たちは近所の高校の敷地内に建てられたプレハブ校舎で一学期を過ごしました。同じ中学から間借りしている高校に進学した友だちが、プレハブ校舎に向かって手を振ってくれますが、なんとも恥ずかしい気分になりました。七月になると、プレハブ校舎の中は暑くて我慢ができません。教室ごとに氷柱が置かれましたが、目には涼しくても教室の温度が下がるわけでもなく、二学期が始まるまでの我慢だとみんなで励まし合いました。

二学期が始まり、やっと新しい校舎で授業が受けられました。が、体育の授業の最初の十五分程度は必ず石拾いから始まります。それでも、若い先生が多く活気がありました。みんなでグラウンドを整備し、みんなで学校を作ったという想いがあります。今では、懐かしき良い思い出です。

（昭和三十七年生まれ）

## 中学校卒業後の進路

大口町の農業は、年間をとおして麦と米が収穫できる恵まれた地域でした。その上養蚕が盛んで、桑畑が沢山ありました。どこの家でも、子ども達は家のために大変よく働きました。田植えの時とか、秋の収穫の時など、農繁期には二三日学校が休みの時がありました。学校が休みとなることはうれしかったが、遊んではいられません。昔は田んぼや畑で、自然と身体が鍛えられました。ただ働くだけでなく、田んぼの付近で、小魚を捕ったりして楽しみました。

小学校から地元の中学校へ進むのが普通で、特別に進学のために勉強するとか言うことはありませんでした。中学校を卒業すると、農家の後を継ぐ人、かわらふき職人とか大工職人・左官職人になる人が多かったです。中には、名古屋や岐阜方面へ住み込みで、商人としての修行に出る人もいました。

大人になって、何をして遊んだのか記憶がありません。ゴルフもない、カラオケもない、麻雀もない、パチンコもない、サッカーもない、今日のような遊びとかスポーツが青年団の頃はありませんでした。草野球というか手作りのボールでお宮さんあたりで、遊んだ覚えはあります。

(昭和十五年生まれ)

## 農業に従事した思い出

昭和三十一年の春、青雲の志を抱いて、ある者は大学へ、ある者は村を離れて就職と、同窓の友はそれぞれの道を歩み始めました。私はしばらくの間、農業に従事することになりました。この頃は自分だけが、とり残されたような惨めな思いを抱いていました。幸い猫の手も借りたいような忙しい時を迎えていたので私は救われました。麦の収穫が終わり、田植えが間近に迫る六月は、まさに農繁期の真っ盛り。麦田おこしは、蒸し暑い最中の男の代表的な力仕事のひとつでした。一本の畝を手動式の田おこし機で畝の左側・真ん中・右側と三回で畝を壊し、一歩後ろへ下がる。こんなリズムで根気よく、朝から晩まで終日頑張りました。

一枚の田んぼへ親父と二人が入り、田んぼの両端から順番に畝を壊して進みます。最後には田んぼの真ん中あたりで二人が出会い、麦田おこしは終わるはずですが、根気よくマイペースで作業する親父。がむしやら、力まかせに田おこしする私。二人を比較すると、親父が田おこしした面積が私より広く、何回挑戦しても一度も勝てませんでした。日四回の食事でも空腹を満たせません。この厳しかった麦田おこしに耐えて、いかにもひ弱だった私の身体は、次第に逞しくなりました。

(昭和十三年生まれ)

